あの灼熱の太陽なんてあの時の僕には関係無かった筈だ

重長真

本文

あの灼熱の太陽なんてあの時の僕には関係なかった筈だ

　校庭でカエルを捕まえた。カエルの首根っこを掴みながら僕は胸を張って教室へと凱旋した。
「おっきい！」
「すごおい！」
　みんなが口々に僕を褒めたたえた。空いている左手で頭を掻きながら僕は、たいしたこと無いよと謙遜してみせた。カエルを見た女の子の中には、気持ち悪い、と呟いて逃げる子もいた。カエルは手足をだらし無くぶらさげていた。
　夏だということもあって、教室にはいくつもの虫カゴが置いてあった。その中の、透明なプラスチックの板で覆われた一つに僕はカエルをボトリと落とした。ひっくり返ったカエルはよっこらせという感じで起き上がると、じっと僕を見つめた。炎天下。僕はカエルの入ったケースに蓋をした。
　始業のチャイムが鳴ると、先生はロッカーの上に置いてあった僕のカエル入りケースを見咎めて言った。きっと、さっきの女生徒に告げ口されたに違いなかった。
「誰ですか、あんな所にカエルなんか置いたのは」
　みんなが一斉に僕の名前を叫んだ。何を競っているでもなく我先にと叫んでいた。何か軽い気持ちで責め立てられている気がして不快だった。
「カエルなんか教室内においてはいけません。放課後に、もといた場所に戻しに行きなさい」
　それまでの間、ベランダにカエルを置いておくことになった。ロッカーの上のカエルのもとへと向かった。カエルは整った姿で座り、うとうととしていた。僕はケースを持ち上げ、ベランダに乱暴にそれを置くと、そそくさと席に戻った。その後の授業は国語で、僕もあのカエルと同じくうとうととしていた。そうしてその日最後の授業が終わり、僕はいそいそと帰り支度を始めた。まだゲームのセーブデータが中途半端に終わっていたから、早く帰って続きをしたかったのだ。

　翌日もその翌日も、僕は昼休みサッカーをして遊んでいた。金曜日、週に一度の掃除の日だが、その日は僕が当番だったので、床拭きのための雑巾を濡らしに蛇口のあるベランダへ友達と向かった。そこには、既に女子達がいて、その視線の先には、この前と同じ姿勢で目をつぶっているカエルがあった。
「見て！寝てる」
　女子はカエルをじっと見つめていた。しかしその体はあまりにもやせ細っていて、肋骨が浮き出ていた。はっとした。
「そういえば、エサあげてなかったな」
「暑いだろうから、水かけてやろうぜ」
　友人が言ったので、僕はケージの蓋を開け、カエルに向けた蛇口から水を噴出させた。水圧でカエルの皮はみるみるはがれていき、そしてカエルの形を留めた骨格だけが剥き出しになって残

った。
　皆が逃げ去った。カエルは、炎天下のなか、エサももらえずに干からびて死んだいたのだ。僕は呆然と立ち尽くした。きっと遺骸の入ったケージを持っていた両手は震えていたに違いない。でも逃げようなんて余裕は心の中になかっただろう。燃え盛る日の光を背に僕は震えた。やがてカエルが口を開いた。
「よく分かったろう。これが、人間なんだ」
　直後、カエルの骨格は僕の心と共にバラバラと崩れ去った。

あとがき

　東南アジアの日本人学校で小学二年の三学期の頃だっただろうか、カエルを捕まえたのは。今こうやって思い返してみると、僕は精神障害者なのかもしれないと思う。その理由なんて僕の口、文からでは到底説明仕切れない。判断は科学に委ねようか。
　こどもというのは飽きっぽく、残忍な人種だ。昭和の頃なんかはカエルの中に爆竹を入れて遊ぶというのが流行ったらしいが、そうやって考えると今のこどもという存在は昔よりは大人しくなってきたのかもしれない。
　成長のなかで人は、命というものの大切さを知るに違いない。私は四年生の一学期の頃、理科で植物を栽培した。その時の私が貰った種はきっと何らかの異常があったのだろう。子葉が生えてきたのだがその葉は分厚く、固かった。そしてそれ以上の成長はしなかった。最初は、みんなのはどんどんと成長していくのに、何故私のだけ大きくなってくれないのか、と非常に腹立たしかった。先生にも、君の植物だと成長の観察が進まないから、他の人のを見させてもらいなさいとも言われた。でも可笑しいのは、そう言われる度に嫌、と言っていたことだ。気にくわないのにも関わらず、僕は自分が育てているあれに愛着が湧いていたのかもしれない。きっとそうだったのだろう。しかし、僕の彼の育成はそう長く続かなかった。いつもの様に屈み込んで地面からの植物の高さを計っていた時だった。近くにあるクラスメートの植物の高さに目を奪われた。見上げるほどの高さまでに成長していたそれは、僕を思わず放心させた。立ち上がり、後ずさってその高さを確認した。大きかった。ふと自分の足元にいる彼を見てみる。粉々になっていた。後ずさった時に踏み付けてしまったのだ。それに彼は軟らかくない。そう、粉々だった。咄嗟に僕は叫んでいたのだ。
「誰だ、僕の葉っぱを踏んだのは！」
　自分だと自覚していた。でも、その責任を他人になすりつけていた。

　クラスのやつがカブトムシの幼虫を意図的に殺したときもそうだった。はっきり言って僕にはカブトムシの命などどうでもよい。なのに、僕はわざと無理矢理憤慨し、木製のロッカーの取手を踵落としで破壊した。奴が嫌いだったから、そいつの罪を重くしようと、僕は深く傷ついたことを装ったのだ。無論、それとこれとは違うので、その件について怒られたのは僕だけだった。

　スズメが芋虫をくわえて死んでいた。死臭。横にはカラスの羽が一つ。芋虫という囮を使って殺したのだろう。体育で使う校庭への移動中、階段で見つけた。当時は鳥インフルエンザが流行ったので、誰もそれに近寄らなかった。でも、僕と隣にいた友人の覚悟は決まっていた。スズメの羽の端をつまみ、砂場の方へと走った。そして、彼を埋め、近くにあった木材を地面に突き刺した。墓だ。その後の授業には遅れた。やがて休み時間が来ると、僕らはマッキーを手に二人であの場に向かい、突き刺した白い木片に黒く太い字で書き込んだ。
『とりのはか』
　やがて僕らはこの墓の近くでボール遊びをすることを禁じた。ボールが板に当たってはそれが

弾き飛ばされていたからである。しかしそんな身勝手な規則は受け入れられるわけがなく、そのことはすぐに職員室の方まで知れ渡った。そしてある日、僕らは先生に砂場へ呼び出された。呼び出されたからには怒られるのかと思いきや、
「墓を移すぞ」
と言われて少し驚いた。巨大なスコップで掘り出されたスズメの体はいまだに原形を留めたままだった。相変わらず死臭は酷いものではあったが。亡骸はスコップに乗せられたまま近くのフェンスの下に掘られた穴の上まで運ばれ、静かに土の中へと埋められた。当然近くにはあの墓標も立てられた。
　あの白い一枚の板は今でも残っているだろうか？例え壊されたとしても、それを経験として反省し、学べたのならスズメもきっと許してくれるだろう。彼が真夏の空へと音もなく羽ばたいた。

おわりに

　いかがでしたでしょうか？
　ほぼ実話なのですが、やはり物語として成立させたいので少しフィクションも織り交ぜさせていただきました。
　もしよろしければ、ダメだし等、お願いします！

筆者

あの灼熱の太陽なんてあの時の僕には関係無かった筈だ

http://p.booklog.jp/book/72583

著者：重長真
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/greenhilldream/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/72583

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/72583

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ